山登如

2020年度
付中通信第９号

実りの９月？

2020.9.25（金）　　高水高等学校付属中学校長　宮本　剛

９月は、運動会と楽学祭という本校を代表する２つの大きな学校行事の開催月にあたります。ところが、コロナ禍によって、７月早々にまず運動会を中止としました。運動会については、岩国市の場合、高校はほぼ中止、義務教育諸学校は各学校の判断に委ねられました。その結果、中止になった学校はほとんどなく、時間を短縮したり種目競技を見直したりといった対策を講じて実施に踏み切ったところが多かったようです。

本校は私学という立場から、こういう場合、国や県の指導を仰ぎながら、その範囲内で名目上は常に独自の判断で動いていることになっています。しかし、独自に決めていいとは言いながら、世間の常識を見極めつつ、批判に晒されたり陰口を叩かれたりしないような、着地点を常に探っています。それは、３月の学校休業や５月の授業再開のタイミングをどうすべきかに始まり、校内のコロナ対策や休業中の学習支援など、振り返れば本当にたくさんの判断、決断を繰り返してきました。

楽学祭（ですが、運動会みたいな一コマ）生徒会のリーダーシップに感服

だから、公立学校の場合、運動会について、市区町村で一律に決めず、各学校の裁量で決めていくとなったことは、意外な対応と私には映りました。

新聞紙上には時折、この間に開催された小中学校の運動会が写真付きで紹介されていました。教職員の皆さんが開催に至るまでにどんなに気を遣い、工夫されたか、その間の苦労の証しを紙面に見るような思いがしました。

付属中学校の立場はきわめて微妙でした。公立中学校が実施に踏み切る中で、高校と歩調を合わせなければならない「たかちゅう」だったからです。高校の運動会自体も実施の可否

について、もちろん賛否両論ありました。感染のリスクが運動会ほど高まるような機会は他にないのではあるまいか、という一言は、まさにそれが正論であるだけに、否定できませんでした。

まあ、そういう意見が出てしまうと、あらゆる密集密着型の営みは、学校現場から消えていくことになります。それって、どうなんでしょう？

そういう雰囲気の中、生徒会の強い要望、リクエストからコロナ禍の楽学祭が企画され、９月１９日・２０日に今年度限りの特別な楽学祭が開催されました。夏休み（と言っても中学２週間、高校３週間に縮減されましたが）に入る前、生徒アンケートを取るところから始まり、かなりの時間と情熱を傾け、練り上げられました。運動会の要素を一部取り込みたいという意見は、大変強いものでした。

教育においては何事も結果ではなくて、過程が大事なわけですから、この間の生徒らの営みは、もしかしたら、例年の楽学祭以上の教育的効果があったかもしれません。それならそれで、コロナ禍も悪いことばかりではないなと思うわけです。